

The idea of Indian Architecture of the members
of the Asiatic Society in the latter part of
the eighteenth century

高松, 由子

<https://doi.org/10.15017/458541>

出版情報：九州芸術工科大学, 2002, 博士（工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

結

18世紀後期における協会員たちのインド建築観には、初期の時代のインドに一種の理想的な世界があり、そこにおける建築が建築の原型ともつながっているという、現在でいう起源論にも近いバースペクティヴを描くものがあった。また古代の「アーリア人」にも関連づけられた、古代インド建築のみを理想化するものがあった。

そこには、「人類单一起源論」、「ヤベテ語」という言語觀、「アーリア理論」という当時のヨーロッパ民族にかんする起源論的な考え方がある程度ひろまっており、そうした古代觀が、彼らのインド建築理解にも適用されていたと考えられる。【表8】

さまざまな起源論的な考え方

18世紀後半のヨーロッパにおいて、言語を根拠に、ヨーロッパ民族の起源をインドに求めるという発想があった。この発想は、19世紀後半にあらわれた「ヘレニズム」という発想とは異なる。ファーガソンによる、ガンダーラ美術と建築、インド北部の石造建築がギリシアの影響を受けてつくられたという発想とも異なる。

こうした図式をみると、コナーがいう「インディアン・リバイバル」は、彼の指摘以上にさらに深い意味が含まれていたとも考えられる。たとえば、インド建築が建築の原型ともつながっている、あるいはインド建築が建築の起源であるといった発想である。

それゆえ本研究は、18世紀後期の協会におけるインド研究の背景として、当時のヨーロッパ民族にかんする起源論的な考え方について、インド建築の起源にたいする協会員たちの特徴的な視点を抽出した。

アジア協会の組織と方向性

1784年1月15日、ベンガルにおいて協会が設立された。これは、ヘースティングスが奨励したインド研究を、いわば制度化したものである。彼らによるインド研究は、政治的な必要性から生じていたとはいえ、基本的に古代インドを対象にするものであり、そこには、彼らがいだく古代インドたいする憧憬があった。また彼らによるインド建築研究は、ディレクタント的でもあったが、インド建築については当初から関心がよせられていた。

『アジア研究』誌における諸概念

18世紀後期、協会の会報『アジア研究』誌（第1-20巻、1788-1839）に掲載されたインド建築に関する論文のなかには、W・チェンバーズ論文（1784、論文の掲載は第1巻、1788）、ジョーンズ講演（1786、論文の掲載は第1巻、1788）、R・ボロー論文（第2巻、1790）、J・ゴールデンガム論文（第4巻、1795）がある。

これらの1講演と3論文は、インド建築研究においては、実証的には不充分なレベルに

あった。とはいっても、初期の時代のインド（チェンバーズ論文においては北インド）には、一種の理想的な世界があり、そこにおける建築が建築の原型ともつながっているという、現在でいう起源論にも似たバースペクティヴを描くものがあったと考えられる。

インディアン・リバイバルの建築作品（メルチエット・パークのヒンドゥー教寺院）

「メルチエット・パークのヒンドゥー教寺院」（1800）は、画家T・ダニエル（協会員）が設計し、ヘースティングズ（協会員、協会のパトロン）にささげるために建設された。ヘースティングズによる「アーリア理論」にも似た発想は、メルチエット・パークにおいて、碑文、建築、庭園としてあらわれた。T・ダニエルは、ギリシアとインドと同じ理想的な古代世界として評価する、ヘースティングズのインド理念を設計に反映させたと考えられる。

グリーク・リバイバルとの類似点

コナーは、「インディアン・リバイバル」が、シノワズリーの流行とは異なって、当初から学術的な態度でのぞまれたと指摘した。また「インディアン・リバイバル」を、19世紀以降の折衷主義によるインドの美術と建築の応用とは、切り離して考えている。

18世紀後期における協会員たちのインド建築観を考察するならば、コナーによる指摘は、あながち誤ったものではないといえる。

ただし本研究は、彼の指摘に、さらに以下のことを加える。

すなわち、18世紀後期という時期、協会員たちによる「インディアン・リバイバル」の建築作品のみならず、彼らのインド建築にたいする研究姿勢は、理想的な古代世界を表現する、あるいは理想的な建築の姿を探求するという文脈において、同時代の「グリーク・リバイバル」のそれと似ていなくはない。また、建築の専門家でない人々が興味を引いたという点においても、「グリーク・リバイバル」のそれと似ていなくはない。

ロココ的な解釈との違い

18世紀中頃まで、ヨーロッパでは、インドの美術と建築を正確にあらわした文献や図版はあらわれていなかった。また室内装飾において、インド、東南アジア、中国、日本の美術と建築が自由に模倣され、導入されたが、それぞれのモチーフは、多様な組み合わせによって演出され、それらのあいだに明確な区別はなかった。

これにたいして、18世紀後期の協会員たちは、インド建築の形態を正確にあらわした版画集を出版した。協会におけるインド建築研究は、理想的な建築の姿を探求するために、学術的な態度でのぞまれた。また、インドの古代史を明らかにするための実質的な情報源として、重要視された。

すなわち、18世紀後期における協会員たちのインド建築観には、それまでのロココ的な解釈とは異なるものがあった。

折衷主義、「ヘレニズム」という発想、ファーガソンのインド建築觀との違い

19世紀中頃のヨーロッパにおいて、インド建築の形態は、歴史上のさまざまな建築様式には固有の価値があるとする、相対主義的な見方による、折衷主義にあらわれた。

19世紀後半、ヨーロッパの歴史概念・思想概念として、「ヘレニズム」という用語が定式化された。

ファーガソンは著書において、さまざまなインド建築の諸形態を体系化した。この意味において、彼のインド建築觀には相対主義的な見方があった。また彼は、ガンダーラの美術と建築や、インド北部の石造建築の起源を、「ヘレニズム」という発想から論じた。

これにたいして、18世紀後期における協会員たちのインド建築觀には、建築の起源にも関連づけられた、初期の時代のインド建築を理想化するものがあった。また古代の「アーリア人」にも関連づけられた、古代インド建築のみを理想化するものがあった。

そこには、理想的な古代世界を探求する、あるいは体現するという文脈において、インドとヨーロッパとを関係づけようとする、当時のヨーロッパ民族にかんする起源論的な発想が、間接的にも投影されていたのかもしれない。

すなわち、協会員たちのインド建築觀には、相対主義的な見方や「ヘレニズム」による発想とは異なるものがあった。ファーガソンのインド建築觀とも異なるものがあった。

既存のオリエンタリズム批判にたいする批判 【図26】

序（1. 問題の所在）で述べたように、現在、インド研究者たちによって自国の建築史が編纂されつつある。しかし、すでに体系化された英国人による既成のテキストにある、彼らのイデオロギー的な部分が問題になっている。

このイデオロギー的な側面について、これまで、ファーガソン以前にかんする研究がほとんどなかった（問題1）。彼のインド建築觀は、当時の英國人のそれを代表していたのではない（問題2）。にもかかわらず、現在、アジア建築を研究する日本人研究者のなかには、植民地時代の英國人によるインド建築觀を、ファーガソンによるそれに代表させている。ファーガソンのインド建築觀を批判するための論理として、ファーガソンのそれに、サイードのオリエンタリズム論にある二項対立的な図式をそのままあてはめている。しかし、サイードのオリエンタリズム論では、アジアの状況は言及されていない（問題3）。その結果、彼らは、植民地時代の英國人によるインド建築觀にかんする真相を、さらに複雑にしている（問題4）。

これらの問題にたいして、本研究は、ファーガソン以前の、インド研究の発端の部分にあたる、18世紀後期における協会員たちのインド建築觀について考察した。

その結果、彼らのインド建築觀には、彼ら以前のロココ的な解釈とも、彼ら以後の折衷主義にあらわれた、相対主義的な考え方とも異なるものがあった。彼らにとってインドとは、それまでの珍奇なものとの対象ではなく、自らの源泉を明らかにするという一つの学問対象であるがゆえに、ヨーロッパとインドとの同質性を重視するものがあったともいえる

だろう。そこには、インドとヨーロッパとを関係づけようとする、当時のヨーロッパ民族にかんする起源論的な発想が、間接的にも投影されていたのかもしれない。

彼らのインド建築觀には、サイードのオリエンタリズム論にある二項対立的な図式とは、まったく逆の面がよみとれる。また、ファーガソンのインド建築觀とも異なるものがよみとれる。

つまり、ファーガソンのインド建築觀は、植民地時代の英国人によるそれを代表していたのではないと考えられる。

インターナショナルな研究動向のなかで

インド建築研究の発端は、英国人によるインド植民地政策と密接に関係している。

また、現在へといたるインド学は、協会によるインド研究によって発展してきたともいわれている。1830年代までには、インド学の全容があきらかとなり、その研究分野が固定されてきたこと、さらに見方を変えれば、その後のインド学があたらしい研究分野を開拓してこなかったことも指摘されている。

インド学の目的は、サンスクリット文献をもとに、そこに展開されている宗教・哲学・思想などを咀嚼することにあった。それは、インドで発達したのではなく、18世紀後期からサンスクリット文献を収集してきたヨーロッパを中心に発達してきた學問である。実際、日本におけるインド学の開祖といわれている南篠文雄は、当時のインド学の権威M・ミュラー（オックスフォード大学）の門下生であった。また、東京大学で梵語学講座の初代教授となった高楠順次郎をはじめ、インド学をこころざす人々は、インドではなく、ヨーロッパを目指してきた。

このようにインド学は、サンスクリット文献だけでインドを代表させるという不思議な學問である。この「インド文化=サンスクリット文献」という図式の背景には、1786年のいわゆる「インド=ヨーロッパ語族」の発見とその後の比較言語学の形成、その研究成果から生まれた「アーリア理論」が基盤にあったとも指摘されている。

ということは、これまでのインド学にある理論的な枠組みは、設立当初の協会において、その基盤が形成され、19世紀以降には、ナショナリズムの高揚に呼応するかのように漸次的に確立されていったともいえるだろう。そして、英国人によるインド建築研究には、インド建築にかんする実証的な研究の成果よりも、既存の理論を重要視するものがあったということも否定できないであろう。

ただし、独立以後のインドでは、インド学の理論的な枠組みに反発する運動が起った。とりわけ1990年代以降、南インド考古学の発展とヒンドゥー・ナショナリズムの高揚とがあいまって、インド学がヨーロッパ中心主義的な理論によって確立されてきたと批判されてきた。こうした理論にたいする反照物として設立されたのが、日本南アジア学会（設立1988）だった。そして、これまでの日本において、植民地時代のヨーロッパ人によるアジア建築理解を批判するための論理として、サイードのオリエンタリズム論にもある、二項

対立的な図式がよく引用されてきた。

とはいえ、この二項対立的な図式は、19世紀ヨーロッパ人が世界史を体系化する過程のなかで登場した発想であり、ヨーロッパ史においては古くからのものではない。また、18世紀後期における協会員たちのインド建築観には、二項対立的な図式とは逆の面がよみとれた。すなわち、インドは、それまでの「エキゾチック」なものではなく、自己の源泉をあきらにするという一つの学問対象へと、その存在を変化させている。ここにおいて、アジアの神秘にたいする謎解きが、ヨーロッパの論理の明晰さそのものへの疑問にすり変わったのであり、二項対立的な図式を前提とした他者理解そのものの枠組みは存在していない。むしろ、インドとヨーロッパとの同質性を重要視するものがあったとも考えられる。それゆえ、植民地時代のヨーロッパ人によるアジア建築理解が、これまでのようないい、アジア建築史にたいして何をしてきたのかということを問題するのではなく、彼らの自己形成に何をもたらしたかということに注目するべきだと思われる。

またファーガソンは著書は、約1世紀にわたる先達研究者による研究の成果でもある。

それゆえ、植民地時代の英国人によるインド建築研究を、その発端の部分から、一つ一つ筋道をつけていくと、彼らがインド建築史を体系化していった経緯が明らかになるであろう。ここに、彼らが抱くインド・イメージが彼らの自己形成に何をもたらしたかということに注目するならば、インド建築にたいする彼らの理論的な枠組みといふ、あらたな真相が浮上してくると思われる。

ここで、協会の研究史について概説したい。インド学の理論的な枠組みが確立された、1784年から1830年代という時期は、「アジア研究」誌の出版の時期とも重なっている。なかでも18世紀後期は、「アジア研究」誌に掲載されたインド建築に関連した論文が最も集中していた。ジョーンズの死後、協会によるインド研究は衰退する。1815-23年、コールブルックによってインド研究が活気づいたとはいえ、この時期でさえも、「アジア研究」誌に掲載されたインド建築に関連した論文はわずかである。そして1840年以降、アングリストの台頭によって、オリエンタリストの時代は終焉する。それ以後、協会によるインド研究は、植民地政策のための補助学的な意味合いを深めていった。

こうした協会の研究史を概観するならば、18世紀後期とは、インド建築研究において特異な時代であったともいえるだろう。なぜ、インド建築研究がこの時期に集中していたのかという問題も浮上してくるだろう。

ただし、この時期の協会によるインド建築研究は、現在の知識から判断すると黎明期にあたったし、彼らの論考は、理念が先行し、実証性に乏しいものであった。とはいえ、彼らの研究を実証的ではないと一括し、顧みないのは危険である。なぜなら、理念が先行するという研究姿勢とその背景にある彼らのインド建築観は、インド学の理論的な枠組みとして指摘されている、比較言語学とアーリア理論などが形成された時代であるからだ。言い換えれば、18世紀後期という時期に、インド建築を含む、インド学の理論的な枠組みが、ある程度かたちづくられていたのかもしれないからである。